

15. 瓢箪から駒

文豪^{ぶんごう}というのは作家の中でも特に優れた作家を指します。近代の日本文学の中で文豪^{ぶんごう}というとはやはり夏目漱石^{なつめ そうせき}でしょうか。漱石^{そうせき}は、「坊ちゃん^{ぼっちゃん}」「こころ^{こころ}」などの小説^{しょうせつ}を書いた作者です。時代が江戸から明治に移ろうとしている時に、漱石^{そうせき}は江戸で生まれました。両親が年をとってからの子供であったのと末っ子だったという理由で、1歳の頃^{ようし}養子^{ようし}に出されました。しかしながら、養父母が離婚したため8歳の時に夏目家に戻ります。その後、成績^{せいせき}が優秀^{ゆうしゅう}だった漱石^{そうせき}は、一生懸命勉強^{いっしょうけんめい}して、東京帝国大学^{とうきょうていこくだいがく}(現東京大学)の英文科に入学します。非常^{ひじょう}に優秀^{ゆうしゅう}で大学の成績はいつもトップだったそうです。しかしながら、この頃から漱石^{そうせき}を死ぬまで悩ませる神経衰弱^{しんけいすいじゃく}が始まったらしいのです。幼児期^{ようじき}の養子^{ようし}の経験^{あにたち}や兄達の死^{しんけいすいじゃく}などが漱石^{そうせき}が神経衰弱^{しんけいすいじゃく}になった理由だろうと言われて

います。

大学を卒業した漱石^{そうせき}は、松山の中学校や熊本の高等学校の教師として英語を教えます。この頃、漱石^{そうせき}は結婚しますが、妻は流産^{りゅうざん}で精神的に不安定になり結婚生活はあまり上手いかなかったようです。結婚生活はともかくとして、研究の面では評価^{ひょうか}され*た漱石^{そうせき}は、1900年に文部省から英語研究のためにイギリス留学を命じられます。せっかくイギリスに渡った漱石^{そうせき}ですが、現地の物価^{ぶつか}は高く、国からの生活費では満足^{まんぞく}な生活は難しく、そのあげく成果をあげなければいけないというプレッシャーから漱石^{そうせき}は再び神経衰弱^{しんけいすいじゃく}になってしまいます。漱石^{そうせき}は勉強どころではなくなり、日本に帰国するよりほかありませんでした。1903年に日本へ帰国後、漱石^{そうせき}は大学で講師^{こうし}の仕事をしますが仕事は上手いかず、そのせいで**相変わらず神経衰弱^{しんけいすいじゃく}もよくなりませんでした。そんな折り、親友^{きんぽ}に気晴らしに小説を書いたらどうかと勧められ、出来上がったのが「吾輩^{わがはい}は猫である^{だいまい}」という題名の小説です。1905年にこの小説が発表されて人気を得

ると、漱石^{そうせき}は「坊ちゃん」^{くさまくら}「草枕」^{しよくぎょう}と次々に小説を発表し、作家を職業にするようになります。「瓢箪^{ひょうたん}から駒」という諺はこんなことを言うのでしょうか。

このように気晴らし^{きばらし}から始まった作家活動ですが、漱石^{そうせき}が作家として活躍^{かつやく}したのは亡くなるまでのたったの 10 年ぐらいです。その短い活動期間にも関わらず、素晴らしい作品を多く残し、漱石^{そうせき}は文豪^{ぶんごう}と呼ばれるようになりました。英文学者として成功せずに作家として成功するということは、おそらく漱石^{そうせき}も考えていなかったでしょう。人生というのは本当に予想^{よそう}のつかないものだと思います。

単語リスト：

文豪（ぶんごう）Văn hào, nhà văn lỗi lạc
養子（ようし）Con nuôi
夏目漱石（なつめそうせき）Natsume Souseki,
Nhà văn nổi tiếng của Nhật Bản
離婚（りこん）Ly hôn
優秀（ゆうしゅう）Ưu tú

神経衰弱（しんけいすいじゃく）Suy nhược thần kinh
流産（りゅうざん）Sảy thai
気晴らし（きばらし）Thoải mái, thanh thản
勧める（すすめる）Giới thiệu, khuyên
諺（ことわざ）Tục ngữ